

档案資料に見る榛苓小学の展開とその教育

藤野真子

はじめに

二十世紀前半の中国において、京劇をはじめとする伝統演劇の俳優は、その多くが文字教養を備えていなかったと言われる。四大名旦の一人にして二十世紀最高の京劇俳優とされる梅蘭芳のように書画作品を残している者は見うけられるが、上海京劇の立役者・周信芳のように演技論や伝統劇改革論をものするレベルの者¹⁾は極めて稀であった。伝統演劇において歌唱の言辞は文語調であり、本来は多少の古典的素養を必要とするが、習得に際しては師匠から弟子への口伝で行われたため、必ずしも媒介としての文字テキストを必要とはしなかったのである。

特に、芸術的な洗練よりも、娯楽性の高い演劇に支持が集まった上海では、凝った仕掛けや派手なセット・衣装といった視覚的効果に重きが置かれ、本来伝統演劇の持ち味であったはずの歌唱や科白の重要性は総体的に低下し、言辞の質も顧みられなくなった²⁾。

その一方で、晩清期に演劇界入りした知識人出身の汪笑儂をはじめ、中国初の額縁式舞台である「新舞台」(1908)を創設した夏月珊・夏月潤兄弟のグループなど、民国初期には「教養ある」俳優たちの一群が活躍していた。中には、後述する馮子和のように、学校教育を受け、文学結社・南社³⁾に参加する者まで現れた。民国初年に上海において、伝統演劇関係者のギルドである上海伶界聯合会を設立し、長らくその中枢にあって影響力を持ったのもまた彼らであった。

本稿で扱う榛苓小学(榛苓学校・榛苓公学)もまた、彼ら先進的俳優グループによって構想され、設置されたものである。

*

本題に入る前に、榛苓小学の創設母体である上海伶界聯合会について簡単に触れておく。同会の機関紙である『梨園公報』の記事⁴⁾などで明記されているように、伶界聯合会は民国元年(1912)、前年の辛亥革命に参加した上記の夏氏兄弟や潘月樵といった俳優た

1) 拙論「周信芳と『梨園公報』」(『野草』第60号、中国文芸研究会、1997年)第2章参照。

2) 玄郎「論梨園子弟之急宜就学」(『申報』1912年11月18日)において、評者は劉芸舟という俳優の新作劇を知識人出身の汪笑儂の作品と比較し、その言辞が鄙俗であることを批判している。

3) 柳亜子主催。柳は馮子和の舞台に魅せられ多くの詩文を書いたが、後に面識を得、馮を南社の正式の同人とした。

4) 茫茫「伶界聯合会的史略」(『梨園公報』1931年1月5日)

ちを中心に設立され、文字通り上海伝統演劇界の互助組織としての役割を長年にわたって果たしてきた。その活動は慈善活動から大規模な合同公演まで多岐に渡ったが、特に名優を揃えた豪華キャストでチャリティー公演が行われる時は、『申報』などの有力紙でも大々的に報道され、終了後それに関する劇評が書かれた。また附属施設として小学校のみならず、養老院や公共墓地⁵⁾まで持っていた。加えて、譚鑫培や梅蘭芳ら北方の大物俳優が上海公演を行う際には宴会をひらいて接待するなど、対外交流機関としての性質も備えていた。

同会の活動については、執行部選挙の結果や活動方針が『申報』に掲載されるなど折に触れ紹介されているが、あくまで断片的なものである。その詳細な実態についてはこれまで中国本土においてもあまり論じられておらず、組織や関連活動の総体的内容について、整理・分析が待たれている。その一部を明らかにすることが、本稿の目的の一つでもある。

1. 「上海市教育局關於私立伶界聯合会立榛苓小学呈請立案」に見る榛苓小学の状況

まず、本稿で用いる档案資料について紹介しておきたい。

本档案資料「上海市教育局關於私立伶界聯合会立榛苓小学呈請立案」(Q235-1-1044)は、2006年8月に上海市档案馆において閲覧・複印したものである。当該档案馆の目録より、上海伶界聯合会関連の档案はこの他に十余件確認できる⁶⁾。

本档案資料は以下のような諸文献によって構成されている。

- ①表紙 (年月記載)
- ②申請者・伶界聯合会による上奏書 (二種)
- ③市政府の受理表
- ④榛苓小学校董会規定
- ⑤上海各学校実況調査表 (印刷されたフォームに申請者側が記入、由来・住所・施設・組織・学制・学費・教職員一覧などが記載されている)
- ⑥総時間表 (学年別)
- ⑦学生一覧表 (二種)
- ⑧学生用書表 (使用教科書の一覧表)
- ⑨組織系等及同仁服務通則 (表紙に「1930年7月重訂」とあり)
- ⑩教職員一覧表 (二種)・担当時間割表
- ⑪校舎平面図

5) 項「伶聯合会扩充真如墓地」(『梨園公報』1929年8月26日)参照。

6) 1930年代後半～建国直前の文献で、俳優の登録や管理に関する問題を扱ったものが多い。

中心となるのは民国16年（1927）11月に上海特別市教育局に提出されたものであるが、「二種」と記された②・⑦・⑩については、16年のものと民国19年（1930）の秋以降に教育局へ提出されたと思われるものとの二種類が存在する。この問題については後述する。

本稿作成にあたっては、同時期の他の関連資料を援用することで、データの正確さを裏付けられるよう配慮した。以下、この档案資料の榛苓小学校史における意義、および記載内容の詳細について個々に考察していく。

（1）榛苓小学の創立時期と変遷

現在流通している戯曲史類の多くの記述において、1907年に榛苓小学の母体が創立されたとされるが⁷⁾、筆者はこれを証明するデータを確認していない。この件については、本档案⑤「上海各学校実況調査表」の「学校沿革概述」欄に、次のように記述されている。

本校は清朝光緒年間に創立され、原名は「春航義務小学」といったが、民国2年（1913）に現在の校名に改めた。その後、訳あって二度休止したが、13年（1924）七月に再度設立、公選を経て孫玉声を校長とした。

意図的になされたのか否かは不明だが、ここには明確な誤記が見られる。榛苓小学の前身とされている「春航義務学校」とは、一般には馮子和がその号「春航」を校名に冠して創立した俳優のための教養学校を指す。学校教育を受ける機会に恵まれた馮子和は、多くの伝統演劇俳優たちが教育を受けられないことを惜しみ、私財を投じて成人向けに一般教養を講じる学費不要の学校を設立した。ただし、それは1922年のことであり⁸⁾、档案における「光緒年間」という記述とは矛盾する。つまり、これは明らかな事実誤認なのである。

もっとも、馮子和は新舞台に長らく所属したこともあって夏氏兄弟らと人脈的には近く、春航義務学校の創立理念と教育内容に、榛苓小学と相通じるものがあることは事実である。

続いてこの文中では、榛苓小学の「復興」が「(民国) 13年」であると記されているが、『上海戯曲志』など中国側のテキストには「民国14年（1925）」と記述されているものがある。この正誤については、1924年8月の『申報』に掲載された以下の記事で判断することができる。

7) 『上海戯曲志』（上海文化出版社、1999年）p61、『上海掌故辞典』（上海辞書出版社、1999年）p261ほか。記述内容が類似しているため、同一ソースから出ていると思われるが未確認。なお、陳科美・金林祥『上海近代教育史』（上海教育出版社、2003年）第四章第一節「上海新式学塾の湧現」によると、光緒末期には多くの小学堂・中学堂が創設されており、榛苓小学（榛苓学堂）もその一つだったと考えられる。

8) 春航義務学校に関する記述は極めて少なく、戯曲史においても「1920年代初頭に創立」等ほかした言い方がなされているが、馮子和が学生全員と撮影した記念写真が残っており、その背景の壁の横断幕に「民国11年（1922）5月21日」と記されているのが読み取れる。なお、学校自体は一年ほどで閉校したと言われる。

伶界聯合会は、この春榛苓公学の再建を決議したことをうけて、公選で夏月珊を校長とし、まず6年制2クラスの小学校を創設した。貧困家庭の子女のみを対象とするため、学費は徴収しない。科目は国文・算術・英文の三つのみで、繆毅父を教務主任、趙軼群と劉劍涯を各教科担当者として招聘することが既に決まっている。先日より先を争って学生が応募してきており、16日の始業式、18日の授業開始がすでに確定している。
 (「伶界会籌復榛苓公学」1924年8月13日)

これに加え、四日後の『申報』には8月16日に入学式が行われ、九十名あまりの学生を前に伶界聯合会会長(夏月潤)、校長などの挨拶があったことが記されている。以上のことがらより、『上海戯曲志』の成立年次に関する記述が誤りであることが見て取れる。

ところで、ここに根本的な疑問が生じることになるが、「民国16年11月」(および民国19年)の日付があるこの档案資料は、一体何を目的として教育局に提出されたものであろうか?

これに関しては、政治状況の変化が大きく影響している。

この档案資料が提出された1927年の4月には国民党南京政府が成立、続いて7月には「上海特別市政府」が正式に成立した。

この時、市教育局局長に任命された国民党上海市党部委員の陳徳征は、すでに設置認可済みの全ての私立学校に再度の設置申請書提出を要求した。さらにその過程で、各学校の設立母体には理事会・基金会の創設および理事の名簿提出を要求した⁹⁾。本档案資料もまた、その折に「設置」申請書として改めて教育局に提出されたものであることは間違いないだろう。

以下、本档案資料の冒頭に付された伶界聯合会幹部による②上奏書の内容を簡単にまとめてみたい。

(1枚目)

- a. 夏月潤ら伶界聯合会理事が榛苓小学理事会の成立を報告、教育局による審査を請求
- b. 一般教育普及のため、民国十三年(1924年)七月に榛苓小学を復興
- c. 学校の場所は(旧城内)九畝地方浜路梨園公所内
- d. 伶界聯合会理事会が榛苓小学理事会を兼任、財政および観察指導の責を負う
- e. 校長および教務長を専任し、校務および教務の責を負う
- f. 夏期休暇に理事会を開き理事長を改選するが、今期は夏月潤が理事長となり一切の責任を負う
- g. 「上海特別市私立中小学校校董会(注:理事会)設立規定」にのっとり、榛苓小学の理事会規定を整えたので、当局要求に沿っているか確認・指示をして欲しい

9)『上海近代教育史』p382

(2枚目)

h. (b, cに同じ)

i. 審査に基づき、榛苓小学の財政および監督指導の全責任を伶界聯合会が負うことを再度確認

j. 「上海特別市私立中小学校校董会設立規定」の改訂部分に付合させるため追加書類を提出するので、認可をお願いしたい

2枚目は文面から判断するに、1枚目提出の後、「上海特別市私立中小学校校董会設立規定」の改正による教育局からの要求に応じ、諸書類を追加提出する際に書かれたものであろう。いずれも署名は「伶界聯合会設立榛苓小学校校董会董事長夏月潤、董事周鳳文・夏月華（月潤の弟）」となっている。

伶界聯合会を設立母体とし、その理事会が榛苓小学の理事会を兼任、学校運営を統括すると同時に、学務そのものは別に統括者（校長）を立てることで、組織の役割分担を明確化する旨説明されている。つまりは、これが教育局の「要求に沿う」ことに他ならないのである。

(2) 榛苓小学の教育とその具体的内容

続いて、榛苓小学の具体的な教育内容について見ていくことにする。

伝統演劇関係者および団体による教育機関の創設は清末～民国にいくつかの例が見られるが、大別してA：旧来の科班を含む俳優養成学校、B：演劇関係者の子弟を対象とした一般教養学校、C：その両者の性質を兼ね備えた学校の三種に分けられる。Aのカテゴリでは、北京の富連成（喜連成）が最も著名であるが、上海でも夏氏兄弟の父・夏奎章による夏氏科班などが開設されていた。Bのカテゴリには、前述の春航義務学校、および榛苓小学¹⁰⁾が含まれる。Cのカテゴリには欧陽予倩による南通伶工学社（1919）、焦菊隠が校長となった中華戲曲專科学校（1930年）などがあり、いずれも近代的な演劇観・教育観に基づいた高度な演劇教育および一般教養教育が実施されていた。これらに関しては、詳細な先行研究があるのでそちらを参照にされたいが¹¹⁾、いずれも一般教養科目としての国語・外国語・歴史地理・数学・体育、および専門としての演劇関係科目が同時に開講されていたことが記録されている。

ここで、榛苓小学における教育内容を確認する前に、同校の歴史について述べた文章を

10) 生徒として息子の月珊（後に父に代わって統括）・月潤らの他、潘月樵、馮子和など、後の伶界聯合会の中核となる俳優が集結していた。

11) 南通伶工学社については、松浦恆雄「欧陽予倩と伝統劇の改革——五四から南通伶工学社まで——」（大阪市立大学文学部『人文研究』40-6、1988年12月）、中華戲曲学校については平林宣和「中華戲曲專科学校とその時代——1930年代中国における伝統演劇認識と教育実践」（『近代中国都市芸能に関する基礎的研究』平成9-11年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号09610462、研究代表者：岡崎由美）に詳しい。後者は学校在籍経験者へのインタビューに基づく。

紹介しておきたい。

伶界聯合会の機関紙『梨園公報』（1928年9月～1931年12月）に掲載された「伶界聯合会的史略」（茫茫、1931年1月5日）は会の歴史を簡潔に綴ったものであり、当然榛苓小学に言及した部分もある。それによると、辛亥革命より前（光緒～宣統の間という曖昧な記述となっている）、夏氏兄弟や潘月樵は「演劇界の子弟にも識字教育を」という考えに基づき、「榛苓学校」を創立したという。以後、榛苓小学と伶界聯合会の活動サイクルとは密接にリンクしていたと思われる。また「伶界聯合会的史略」では、伶界聯合会の活動について、創始期を清末～民国初、停滞期を第二次革命（1913）～民国9年（1920）末、復興期を民国10年（1921）以降として、三つの時期に区分している。

実はこの「復興期」が始まる1921年頃、榛苓小学はいったん再建されていたようである。まず、『申報』1921年5月7日の「上海伶界聯合会第一次八班大会串（上）」という記事を見ると、この時の伶界聯合会の会議において決定された五項目の計画のうち、「義務学校を設立し、教育を普及する」ことが第一に挙げられている。

一方、次のような記録もある。

1920年、上海伶界聯合会は九畝地の方浜路に我が国戯曲史上初の、役者による役者の子弟のための学校——榛苓小学を開設した。演劇界の子弟は学費を免除されていた。李長勝（李如春の父）は息子をこの学校に入れ、正規の（演劇の）訓練を受けさせた。この榛苓小学は「新型学校」ではあったものの、学生は文化を学ぶ一方で技芸を学ぶこともでき、旧来の科班のような性質がよく残されていた。毎日午後の文化科目は、帳簿係の王さん¹²⁾が兼任していて、教えると言っても、赤字で印刷した書道の手本をなぞるぐらいのことだった。学生は文化のことなど興味はなく、いたずらをして、いつも先生をからかってばかりであった。芝居の実技に至っては、教師も依然として旧来の科班の教え方を踏襲していた。（甘霖「李如春從芸之路」¹³⁾）

これを読む限りでは、基礎教養のみを授ける目的で開校されたはずの榛苓小学で、伝統演劇の実技も教えていたということになる。以下あくまで推測であるが、この時点における榛苓小学は、演劇関係者の子弟にとって伝統演劇の基礎演技を習得する場であり、基礎的教養を学ぶことは副次的なことと見なされる体制になっていたのではないか。その後、何らかの事情で運営が行き詰まり、1924年に再度再建されるに当たって、機構・カリキュラムの双方に改革が施されたのではないだろうか。

あらためて、それから三年後の1927年、つまり本档案資料においては、どのようなカリキュラムが組まれていたのだろうか。まずは、档案資料の⑧学生用書表をそのままの形で

12) 档案資料のうち、1927年提出の教職員表に1924年8月再雇用の「庶務員」としてその名が見える。

13) 中国戯曲志上海卷編輯部『上海戯曲史料薈萃』第五集所収、1988年

挙げておく（オリジナルは縦書）。

科目名	教材	出版社	一年級	二年級	三年級	四年級	五年級
国文	新撰国文教科書	商務書館	初一冊	初三冊	初五冊	初七冊	高一冊
自然	新撰自然教科書	商務書館					高一冊
地理	新撰地理教科書	商務書館					高一冊
歴史	新撰歴史教科書	商務書館					高一冊
算術	呉編算術教科書	南洋公学				第一冊	第一冊
	新学制算術教科書	商務書館	初一冊	初三冊	初五冊	尺牘	尺牘
尺牘	言文対照尺牘	世界書局				上冊	下冊
	尺牘版本	世界書局		上冊	下冊		
三民主義	補充三民主義読本	世界書局				第三冊	第三冊
	三民主義課本	世界書局	初一冊	初三冊			
	三民主義教科書	世界書局			第一冊		
常識	常識課本	世界書局	初一冊	初三冊	初五冊	初七冊	
英文	天方夜譚	商務書館					用
	新式高英文	中華書局		第一冊	第一冊	第二冊	
	初等英文法	中華書局					用
孟子		中華書局				第一冊	第一冊
音楽	(選授)						
体操	(選授)						
図画	(選授)						
手工	(自撰)						

表中の「尺牘」とは定型の書式を持つ古文調の書簡であり、その書き方を習得する授業であろうと思われる。また、ここに記載された科目名以外にも、⑥の総時間表には珠算・造句（作文）・書法（書道）・工芸・形芸（図画・手工に相当か）などの科目名が見られる。

前掲の『申報』1924年8月13日の記事で「国文・算術・英文」の三科目のみ開講と記されていたことを鑑みると、3年間で科目数が飛躍的に増えている。言うなれば、補習塾程度のカリキュラムから、一般子弟対象の学校と比較しても遜色のない、主教科・副教科が全て揃った本格的な学校教育のカリキュラムへと大きく変貌を遂げたわけである。

このカリキュラム拡充が順次行われたのか、あるいは再度設置認可を求める際に思い切って改革を施したのかは不明であるが、1927年のこの時点で、初等教育としては十分なボリュームを備えていると言えよう。また、『申報』の記事を読む限り、遅くとも1924年の時点からすでに一般子弟が学生として入学しており、且つ時間割も昼休みを挟んで午前午後50分授業を各3時間、一日計6時間のスケジュールとなっている。もしこの時間割通りに授業が実施されていたのであれば、少なくとも李如春が回想する時代とは、教室の

空気もかなり異なっていたことであろう。

(3) 学生と授業形態

本档案資料には⑦学生一覧表（学生名簿）が二種類添付されている。一方は1927年、もう一方は1930年のもので、フォームと記載事項に若干の違いが見られる。

この⑦を含め、1930年提出の書類が1927年のものと一緒に綴じられている理由は不詳だが、南京政府が前年の1929年4月に「三民主義教育」の実施を発表し、7月に訓育主任・党義科目担当教員を置くよう各学校に命じたことと関係があるのかもしれない¹⁴⁾。また、翌年の『梨園公報』の記事から、おそらくこの時の「申請」が教育局に批准されたであろうことが読みとれる¹⁵⁾。

まず1927年の名簿であるが、縦書きで上から氏名・年齢・本籍地・入校年月・学年・学歴・備考が記入されている。

学年毎の合計人数・年齢の幅・入学年月を抜き出し整理したのが下記の表である。

学年	人数	年齢	入学年月
五年級	17	11～17	民国十三年八月～十六年八月
四年級	17	10～15	民国十三年八月～十六年八月
三年級	36	9～15	民国十三年八月～十六年八月
二年級	70	8～14	民国十五年二月～十六年八月
一年級	54	7～11	民国十五年八月～十六年八月

学年が上になるほど人数が少なくなるのは、家庭の経済的な事情から働き手として期待され、結果的に学業が継続できない生徒が増えてくるからであろう。年齢も最低就学年齢から高級中学相当までまちまちだが、学歴欄を見ると、私塾や他の小学校への在籍経験が数年ある者が、学年が上がるにつれ増えてくる。なお、この表には学生の性別は書かれていないが¹⁶⁾、⑤の上海各学校実況調査表には「女生数：四十二人」と記されている。また、備考欄には留年歴も記載されている。

この年度の名簿には六年生が見あたらないが、これについては数年間に渡る休止後、民国13年（1924）に再開したため五年生が最上級生となる旨、備考欄に記入されている。ここからも、前節で述べた侖界联合会「復興期」当初の榛苓小学が、何らかの事情で、おそらくかなり短い開校期間のち休止状態に入り、カリキュラム上もいったん断絶してしまったことが見て取れよう。

続いて、1930年の名簿を見ていく。同じく縦書きであるが、性別が記載されている点が

14) 『上海近代教育史』 p384

15) 「榛苓小学令准立案」（『梨園公報1931年1月18日』）参照。なお、この記事を読む限り、榛苓小学はこの時点まで教育局の「認可校」ではなかった可能性もある。

16) 備考欄に女子小学校在籍歴あり、と記されている者もいる。

1927年のものと異なるため、下記の表に反映させた。また、原本の学歴欄には在学年数などは書かれていない。

学級	男子	女子	合計	年齢	入学年月
六年級	5	0	5	13～15	民国十五年春～十八年春
五年級	11	0	11	11～17	民国十四年春～十九年秋
四年級	23	0	23	11～15	民国十四年春～十九年秋
三年級	38	0	38	9～15	民国十四年春～十九年秋
二年級	25	12	37	8～13	民国十六年春～十九年秋
一年級	38	8	46	6～13	民国十七年秋～十九年秋

一見して分かるように、三年生以上に女子生徒は在籍していない。実は榛苓小学は男女共学を標榜しているものの、⑤の上海各学校実況調査表によると「二四制」が採用されており、且つ「前期男女同校、後期専収男生」と明記されている。つまり、三年生以降が後期に相当するのである。

また、1927年度は50人、1930年度は40人を越える学年が見られるが、榛苓小学の授業形態はいわゆる「複式学級（複数の学年が同一の教室で授業を行う形態）」であった。まず、⑪校舎平面図を見ると、教室として使用している部屋は3つしかない¹⁷⁾。また、⑥総時間割表は一枚につき二学年記入されている。もし本当に档案資料の通りの人数・授業形態であったならば、例えば1927年度の低学年は合計124名が同じ教室で授業を受けることになる。劣悪な環境であったことは想像に難くないが、同時に多くの子弟が安い学費¹⁸⁾に惹かれ、殺到したのであろうことが伺える。

(4) 教員

⑩教職員一覧表についても、1927年・1930年と二種類のフォームが見られる。

1927年の方は、教員各自の学歴・職歴の記載はあるものの、担当科目の記載がない。これに対して、1930年の方には明記されているが、複数の科目を兼担している教員が半数ほどいる。ここには、給与の額が記載されているが、役職付きの教員と科目担当のみの教員とでは、年齢がほぼ同じであっても最大三倍の差が付いている。また、一部の教員には最終学歴が書かれているが、職歴を以て代替している教員も見られる。

17) 傍観「榛苓小学行将扩充」（『梨園公報』1931年6月2日）によると、この年、入学できない応募者が多数出たため、新たに教室を一つ確保、全校で二百人以上を収容することができるようになったと述べられている。

18) 榛苓小学は元々夏月珊らが投じた私財を核に、チャリティーなどによる収益で運営されていたため、梨園の子弟は学費免除だったが、一般の子弟は減免があったものの学費を払っていた。『梨園公報』では、1928年9月14日強「榛苓小学之近況」にて財政の枯渇から学費徴収を検討すること、同11月2日「伶界維持会一年之会務簡報」で非・梨園子弟の学費を半額徴収にすること、また注17「榛苓小学行将扩充」では、学費を月に1元値上げすることなどの記事が見られる。

なお双方を通じて、校長・孫玉声、教務長・梅頌先に変更はない。彼らを除いた教員数は、1927年・1930年とも7名となっている¹⁹⁾。

(5) その他

学費・設備維持費等諸経費に関する申請事項も1927年・1930年の両方に記載されている。

また申請書と共に、1927年は「伶界聯合会立榛苓小学校董界規定」、1930年は「伶界聯合会榛苓小学 組織系統及同仁服務通則」が提出されたと思われる。前者は校長の任免や理事の選挙など理事会の総則を手書きで記した比較的簡単なものであるが、後者は活版印刷で十八頁にも及ぶ大部なものである。内容的にも、科目別指導方法、成績評価、生徒指導、セクション毎の職務など多岐に渡っており、いずれも些細な部分まで言及されている。興味深い資料だが、本稿ではその存在を紹介するに留める。

2. 『梨園公報』の記事に見る榛苓小学

以上、本档案資料から見出しうる榛苓小学の歴史的変遷、授業科目等を中心に考察してきた。繰り返しになるが、本档案資料は1927年および1930年に伶界聯合会から上海特別市教育局に提出された「設置認可申請書」および附属資料であり、記載されている内容以外の正規科目・設備等が存在することは考えにくい。

確かに演劇互助団体の附属学校でありながら、榛苓小学の正規カリキュラムには、実技はおろか、演劇に関連する教養科目さえ見あたらない。元来、設立に際してのコンセプトは「演劇界の子弟にも識字教育を」というものであり、本業の技芸は各自がしかるべき機関で習得することが想定されていたのではないだろうか。

とはいえ、現在流通している戯曲史の多くで、榛苓小学は以下のように紹介されている。

学生の学習過程は、文化科目と芸術科目が半々で、文化科目の内容は、一般の小学校と全く同じである。芸術科目は低・中・高級の三級に分かれている。低級は土台作りの時期であり、基本技術を練習する。中・高級では学校は各々の学生の容姿・声質などの条件により、専門の教師が各行当（役柄）ごとに芝居を教え、併せて学校の上演活動に参加する。……²⁰⁾

また前述したように、李如春の回想が正しければ、1920年頃の榛苓小学には実技科目が

19) 1930年のフォームでは、鄧光という若い男性教員が訓育科長と党義科目の担当者を兼任している。

20) 『中国京劇史』上巻、第八章「南派京劇的形成与發展」（中国戲劇出版社、1990年）

存在していたということになる。

もしこれら演劇的専門教育の実施が事実であれば、それに関する記載が榛苓小学設立の公式な申請書に見られないのは何故だろうか。

一つの可能性として考えられるのは、こうした実技科目は梨園の子弟だけを対象とした「課外授業」として実施されており、正課として申請する必要がなかった（もしくは意図的にしなかった）ということである。そこでは、李如春が経験したような「昔の科班のような」実技教育がなされていたかもしれない。そもそも、榛苓小学は伶界聯合会の敷地内に設けられており、出入りする俳優の誰かから演技を習う機会は沢山あったことであろう。

これら背後の事情および1930年以降の榛苓小学の動向に関する情報が不十分であるため、現段階ではこれ以上の考察は差し控える。いずれにせよ、榛苓小学は日中戦争の激化による再度の休止を経て1950年代まで存続したのであり²¹⁾、そこに至るまでの過程は後日明らかにする必要があると考えている。

*

最後に、档案資料とほぼ同時代の榛苓小学に関する情報をもう少し紹介し、その輪郭をいささかなりとも明確にしておきたい。

榛苓小学に関する記事が最も多いのは、これまでも文章を引用してきたが、設立母体である伶界聯合会発行の『梨園公報』である²²⁾。会の活動を宣伝することもあれば、巷の芸能系小報のゴシップ記事に対抗して論陣を張ることもあるが、総じて書き手には当時の上海演劇界の大物が揃い、記事の史料的価値も高い。一方、『梨園公報』の基本的役割は伶界聯合会の同仁に対する活動報告である。中でも次世代を育てる機関である付設小学校の話題は、注目を集めるものの一つだったのであろうことが、関連記事の多彩さからもうかがい知れる。

例えば授業科目については、教育課程全体を改良し、国文については教育部の指導のもと、最新の白話文（口語文）を教えるように変更したこと（1928年9月14日「榛苓小学之近況」）、また運動場がないため、「知・徳・体」の「体」を補うべく、上級生が率先して公共の運動場へ足を運び、自主的に運動していたこと（1931年11月2日「榛苓短訊」）などが記されている。他に学生に関連した話題では、「榛苓市政府」という名の自治会を学生が組織し（1931年9月11日「榛苓市政府改組」）、教師の指導で毎週弁論大会を開いていたこと（同20日「榛苓学生之演講競賽会」）も紹介されている。

また、運営状況については、学生募集の案内広告（1931年1月）、先にも触れた入学希望者の増加による教室の追加（1931年6月2日「榛苓小学行将扩充」）、およびその結果増加した新入生の半分が梨園の子弟であったことで、演劇界における教育に対する認識の高

21) 1956年、南市教育局によって接管。現在も現地には「榛苓街」という通りの名前が残っている。

22) 他には、入学シーズンが来ると『申報』等の新聞に学生募集の記事が掲載されていた。

まりを感じたこと（1931年9月5日）などが書かれている。

時事を反映したもので特筆すべきは、1931年の九・一八事変発生による、全学を挙げての抗日運動であろう（10月2日「抗日声中之榛苓小学」、同20日「榛苓師生将举行不买日貨宣誓」）。特に、10月2日の記事における教育局の抗日指導の通達については、「日本軍の暴虐の様子を児童に知らせる」「毎日時事を掲示し、児童の愛国心を喚起する」など戦時中独自の強張った空気が記事からも感じ取れる。

これらの記事を読むと、榛苓小学を「俳優養成機関」として紹介している文章が皆無であることにあらためて気付く。プロの俳優が学校を訪問したという記事さえも見あたらない。これは『梨園公報』の記事を執筆する人々、つまり伶界联合会内部の人間が、そのような学校として榛苓小学を認知していなかったことの証左ではないだろうか。

档案資料と併せて鑑みるに、やはりこの1930年前後の時期に限って言えば、「榛苓小学」は初等教育を主体とする私立小学校として認知されていたのである。いわば、創始者の目論見通り、演劇会の子弟に識字教育を授ける機関としての機能を立派に果たしていたのだと言えよう。

*本稿は、平成19年度科学研究費補助金（若手研究（B））「民国期上海における伝統演劇の展開」（課題番号：18720091、研究代表者：藤野真子）による研究成果の一部である。

从历史档案资料所见的榛苓小学的发展和教学情况

藤 野 真 子

民国元年（1912）、上海的夏月珊、夏月润、潘月樵等进步京剧演员组成上海伶界联合会、开办了养老院、伶界商圈、伶人公墓等、为同仁的福利而努力。

榛苓小学也是上海伶界联合会为了给梨园子弟以基础教育而兴办的。

上海市档案馆所收藏的关于上海伶界联合会的各种档案资料中就有1927年该校向上海特别市教育局提交的申请等材料。

通过对这部档案的内容、包括各种表格数据的分析、可以比较清晰地看出当年榛苓小学的教学课程设置、学生在册人数、财政情况等。由于这份珍贵的历史资料长期没被发现、因而目前与之相关的研究还是空白。通过对这份材料的透彻分析和深入研究、同时参考伶联会所发行的《梨园公报》里的有关该校的相关信息、我们将会对伶联会有一个更清晰、更全面和更深入的了解。